

私の提言

雨乞いとダム乞いからの転換を

柴田安彦



七月十九日、建設省は設楽町に対し、ダムの規模を拡大したいと言いつ出した。この提案では、堰が九m高くなり、水没家屋が三十〜三十五戸増えるという。新聞は地元への反応を「憤慨、緊張感を高めている」と報じた。国をはじめ、県も市も「水不足の解決策は設楽ダム」の一点張りである。ほんとにそれでいいのだろうか？

大型ダム建設は莫大な時間と費用を必要とする。ダムの水が使えるのはずっと先であり、それまでは雨乞いをするしかない。費用のツケが住民にまわされることと環境破壊は、長良川河口堰で実証済みである。大手ゼネコンはよくても、住民はそうはいかない。

雨は水源地だけに降るわけではない。豊川にはたくさん支流があり、その水を集めてとうとうと流れている。豊川の流れは設楽ダムより上流からの水ばかりではなく、もっと下流の鳳来や新城からの量も大きい。それぞれの支流に調整池をつくれれば、最も広い範囲の水を集めることができるはずだ。この方法なら条件の整ったところから建設でき、できた池から利用ができる。時間的にも有利であるし、安全だ。何よりも村ごと水没などという悲劇はうまれない。

水の利用でも考え直すところがある。豊橋のM社は日量七万二千トンの水利権

を持っているが、三万一千トンしか使っていない。その差は蒲郡市で使う上水の一・五倍に相当するが、他人が使うわけにはいかない。国や県が調整をはかるべきである。

倉敷市の北に、人口四千人ほどの山手村という小さな町がある。水源のないこの町では、下水道の処理水を土壌浄化し農業用水として再利用している。「同じ水を二度使えば、水は半分ですむ」というわけである。ため池を埋め、公園にしてしまった蒲郡とは大違いである。

蒲郡市は、水源町村の集会所や道路の建設に金を出したり、設楽の山林の権利を買ったりしている。しかし、本気で水源地のことを思うのであれば「ダムを造らないこと」が一番ではないのか。今までに、ダムで栄えた町はない！

一刻も早く、雨乞いとダム乞いの水対策を改めるべきだと思う。

(市議会議員)